【佳作】少しずつ　世界がおかしくなっていく
あの子に告白したいだけなのに

著者：秋雨三雲

高校２年の夏休み、僕はベッドの上でスマホを握りしめて唸っていた。画面上ではメッセージアプリが起動している。

「えーと、お久しぶりです……明日、僕とデートに……あっ、間違えた。僕と部活動を……うんうん」

メッセージの相手は、高校の後輩の成瀬さんである。僕と成瀬さんは地域密着部という部活に所属している。（部活といっても部員が２名しかいないため、厳密には同好会である。）地域密着部とは、その名のとおり地域に密着した活動を行う部であるとされているが、ようするにその実態は生徒全員が何かしらの部活動に所属しなければならない校則の中で、文化的でもなく体育会系のノリにもなじめない自堕落かつ内向的な生徒たちが開拓した逃げ道のうちの１つなのである。

ちなみに設立者は僕だ。僕が高校に入学したとき、すでに自堕落かつ内向的な先輩方が、いくつかの活動の実態のない名ばかりの部活を作っていたが、並外れて自堕落かつ内向的な僕は、それらの部活に入部届を提出することすらできなかったのだ。そのため、やむなく新たなペーパーカンパニー、もとい地域密着部を設立した次第である。

そんなわけで、地域密着部はまさに、僕による僕のための僕の部活動であった。まさか我が地域密着部に新入部員が加わるなどとは夢にも思っていなかった僕は、今年の４月、僕に向かって入部届を差し出す成瀬さんの姿に度肝を抜かれた。度肝を抜かれたというか、心臓を射抜かれたというか……ようするに一目ぼれである。深い森の奥に湛えられた湖のような、静謐な雰囲気をまとった佇まい。入部届を受け取るときに成瀬さんの白い手に僕の指先が触れてしまったのもいけなかったのかもしれない。僕は完全に成瀬さんのことが好きになってしまった。

しかし、活動実績がないのが売りの我が地域密着部である。入部初日に連絡先を交換して以来、僕と成瀬さんの交流は完全に途絶えてしまった。

そんなわけで夏休みも終盤の今日この頃、僕は一世一代の勇気を振り絞り、部活動にかこつけて成瀬さんをデートに誘おうとしているのである。

これは賭けだ。下手すると断られるどころか、活動を持ちかけたことで「ペーパーカンパニーじゃなかったんですね」と成瀬さんがよその部活へ移ってしまうかもしれない。しかし、僕には一縷の勝算もあった。たとえこんな部活に所属する人間とはいえ、いや、こんな部活に所属している人間こそ、実は誰よりも他者との交流を求めているのではな

いだろうか。他ならぬ僕自身がそうだった。成瀬さんが入部届を持ってきたとき、その佇まいがあまりにも美しかったということを抜きにしても、僕はものすごくうれしかったのだ。成瀬さんだってもしかしたら、波風一つ立たない孤高の高校生活に何者かの乱入を夢みているかもしれないじゃないか。

「しかし、どこへ誘おうか」
地域密着部の活動というからには、我々の住むこの佐賀県玄海町のどこかへ出かけるべきだろう。候補はいくつかあるが、ここはやはり……。
僕はたっぷり1時間かけて文章を作成し、それからさらに3時間ほど逡巡したのち、次のメッセージを成瀬さんに送信した。

「お久しぶりです。
地域密着部の夏休み課外活動を行おうと思うのですが、明日、浜野浦の棚田を観察しに行きませんか。」

浜野浦の棚田といえば、日本有数の恋人の聖地である。
海岸から空へ向かって駆け上る階段のように田が形成されており、この季節なら日中は青い空と生命力みなぎる深緑の稲が、夕暮れ時には真っ赤に染まる海と棚田が見られる。僕の知る限り、世界で一番ロマンチックな場所だ。
よし、明日ここで夕日を見ながら成瀬さんに告白しよう、と僕は自分に誓った。
これは余談だが、浜野浦地区には昔、男がたき火をしていると金玉の大きな狸が美しい女性に化けて火にあたりに来たという言い伝えが残っている。「最高の日本晴れだ」
翌日、僕は成瀬さんとの待ち合わせ場所である棚田展望台に来ていた。ここから棚田と海を一望することができる。待ち合わせの時間まではあと2時間あるが、家にいても落ち着かないので早めに来ることにしたのだ。昨夜の成瀬さんの返信は「行きます」の4文字だけというかなりそっけないものであったが、僕を舞い上がらせるには十分であった。降り注ぐ日差しと棚田を通過してくる爽やかな潮風を肌に感じながら、どれくらい時間が経っただろうか。僕がそわそわと展望台の階段を上ったり下りたり、木製の手すりをなでたり突っついたりしていると、視界の端に人影が映った。心臓が早鐘を打つ。なんとか平静を装いながら振り向くと、同じクラスの絹田がいつものうさんくさいニヤけづらで立っていた。
「なんでお前がいるんだ！？」
動揺して思わず大きな声が出る。
「ずいぶんなご挨拶だな。野鳥観察だよ。俺様は鳥を見るのが趣味なのだ。」
絹田という男は学校でその名を知らない者はいないほどの変わり者である。とにかく人をからかうのが好きで、教師だろうが不良だろうが見境なくちょっかいをかけては相手

がうろたえる姿を見てゲラゲラ笑っているのだ。学校中の人間が絹田のいたずらの餌食になっているのだが、いかんせん逃げ足が速い上にあらゆる人々の弱みを握っているため誰も手出しできずにいる。かくいう僕も絹田に何度か弁当のおかずを奪われたり、不良に追われる絹田を部室にかくまわされたりしている。

「……なんで来た？」
僕は苦虫を噛み潰したような顔で、もう一度尋ねた。
「おいおい、話聞いてたか？鳥を見に来たんだよ。それともWhyじゃなくてHowのほうか？それなら答えはチャリできた、だ。いやぁ、この辺りは坂が多くていい運動になるな。」
道の傍らに自転車を止め、手に持ったスケッチブックで顔を仰ぎながら絹田が言う。
なんだ、本当にただの野鳥観察なのか？僕と成瀬さんのデートを嗅ぎつけて邪魔しに来たのかと思ったが、さすがに僕の考えすぎだったかもしれない。
「お前は1年の成瀬と待ち合わせだろ。せいぜいがんばれよ。」
なんで知ってるんだ！僕が無言で口をパクパクさせるのを見て、絹田が満足げに笑う。
「当たりか。似合わないネックレスなんかつけてそわそわしてたから、そんなことだろうと思ったぜ。」
くっ、やっぱりこいつ、むかつくな……。鎌をかけられ、見事に引っかかってしまった屈辱に打ちひしがれる僕の背中を絹田がポンと叩いた。
「今日は野鳥観察で忙しくて見届けてやれないが、最高の失敗談を楽しみにしてるぜ。」
そう言い残し絹田は去っていった。最低の発言だったが、腹が立つより、今日のデートが絹田に邪魔されないことへの嬉しさが勝り、僕は小さくガッツポーズをした。

成瀬さんは約束の時間ぴったりに現れた。
「や、やぁ」
緊張で声が裏返る。
「こんにちは、先輩。背中に何かついていますよ」
「え？」
本当だ、手をまわしてみると、僕の背中になにやらセロテープで紙のようなものが貼り付けられているようだった。はがして見てみると、それはスケッチブックを1枚破ったものであった。鉛筆で大きく「初デート中」と書かれている。先ほど絹田に背中を叩かれたのを思い出す。
「あの野郎……」
「何か書いてあるんですか？」
成瀬さんの問いかけで我に返る。
「いや、なんでもないよ。ただの紙だった。いやはやそんなことよりいい景色だね。」

紙を丸めてポケットに突っ込みながら、もう片方の手で棚田の方を指す。
「本当ですね。海からの潮風で稲が波みたいに揺れて、もう一つの海があるみたい。」
なんて素敵な表現をするんだ、と僕はのぼせ上がる。
夕暮れ時にはまだ時間があるが、もうこの想いを抑えることができない、今告白してしまおうか、などと考えていると、展望台に面した道路の真ん中に狸がいることに気づいた。この町で狸に遭遇すること自体はさほど珍しくもないが、そいつはなんだか普通の狸とは様子が違っていた。なにやら空を見上げてぼんやりとしているのだ。そこへトラックがやってきた。運転手は狸に気づいていないようだ。狸は自分に向かって轟音を上げて突進してくるトラックに気がついたようだが、慌てて逃げようとするも足元の何かに引っかかって、つまづいてしまう。
僕は走り出した。大丈夫、トラックは迫っているが、まだ間に合う距離だ。このまま狸を抱えて道のわきに転がればいい。
道路に出た。僕は狸を抱え、そこで狸が先ほどから引っかかっていた物の正体に気づく。
「金玉だ……」
巨大な金玉だった。
うそだろ、でかすぎる。ちょっとした布団くらいある。あまりの金玉の大きさに気を取られた僕は、ついでにその大きな金玉に足も取られてしまった。まずい、と思った時には僕は道路に膝をついていた。トラックはもう目前まで来ている。とっさに手元に転がっていた狸を歩道に放り投げる。
ガン！という強い衝撃の後、体が宙に浮くような感覚を最後に、僕は意識を手放した。
気が付くと、僕は自室のベッドの上でスマホを握りしめていた。
どうなってるんだ、トラックにはねられたのではなかったか？混乱しつつ体を確認するが、かすり傷一つない。手にしていたスマホをのぞき込む。メッセージアプリが起動しているが、昨日成瀬さんに送信したはずのメッセージがない。そこで僕は、スマホに表示されている日付が昨日のものであることに気づいた。時刻を確認する。昨日成瀬さんにメッセージを送る少し前の時間を示していた。
「夢だったのか？」
それにしては妙に現実感があった気がするが。僕はやや釈然としない気持ちを抱えながらも、他に納得できる説明も思いつかなかったので、とりあえずは夏の日差しが見せた白昼夢だと結論付けた。浜野浦の棚田で成瀬さんと過ごした甘い時間が現実でなかったことに落胆しないではなかったが、明日のデートの予行演習ができたと考えれば悪くない。
「そうだ、成瀬さんをデートに誘わねば」
そう思ったそのとき、
「浜野浦の棚田はやめておけ」
と僕の頭の中で声がした。確かに、先ほどのトラックにひかれた夢のこともある。ほか

の場所にするか。僕はたっぷり1時間かけて文章を作成し、それからさらに3時間ほど逡巡したのち、次のメッセージを成瀬さんに送信した。

「お久しぶりです。
地域密着部の夏休み課外活動を行おうと思うのですが、明日、淀姫神社を観察しに行きませんか。」

淀姫神社は、浜野浦の棚田から北へ少し行ったところにある神社である。海のすぐそばに建っており、境内からは水平線や、そこに浮かぶ島々を一望できる。歴史を感じさせつつもよく手入れされた拝殿は、見る者を非日常へといざなってくれる。浜野浦の棚田に並ぶロマンチック・スポット・パート2というわけである。よし、明日ここで夕日を見ながら成瀬さんに告白しよう、と僕は自分に誓った。神社ならトラックにはねられる心配もないし。
これは余談だが、淀姫神社のある外津地区には、赤鯛が人間の女性に化けて、自分の命を救ってくれた漁師のもとへ嫁いで来たという言い伝えが残っている。「最高の日本晴れだ」
翌日、僕は成瀬さんとの待ち合わせ場所である淀姫神社に来ていた。待ち合わせの時間まではあと2時間あるが、家にいても落ち着かないので早めに来ることにしたのだ。昨夜の成瀬さんの返信は「行きます」の4文字だけという、夢同様非常にそっけないものであったが、僕を舞い上がらせるには十分であった。さんざん迷って、夢で絹田に似合わないと言われたネックレスは外してきた。降り注ぐ日差しと爽やかな潮風を肌に感じながら、どれくらい時間が経っただろうか。僕がそわそわと境内の階段を上ったり下りたり、狛犬を眺めたり撫でたりしていると、視界の端に人影が映った。心臓が早鐘を打つ。なんとか平静を装いながら振り向くと、絹田がいつものうさんくさいニヤけづらで立っていた。
「なんでお前がいるんだ！？」
浜野浦の棚田にいるはずじゃなかったのか。いや、あれは夢か。
「野鳥観察だ。鳥を見るのが趣味でな。まぁ、俺のことは気にせずデートに励んでくれ。」
スケッチブックを軽く掲げて絹田が言う。僕は夢で背中に「初デート中」と書いた紙を張られたことを思い出し、絹田から距離を取る。
「気にするなってまさかお前、ずっとここに居座るつもりか。」
「ああ。俺のことは狛犬か何かだと思ってれくれていいからな。」
こんなに邪悪な狛犬がいてたまるか。待ち合わせの場所を変更すべきか、と考え始めたところに、成瀬さんがやって来た。
「や、やぁ」
緊張で声が裏返る。

「こんにちは、先輩。」
幸いにも絹田は、少し離れたところでおとなしくしているようだった。面白そうにちらちらとこちらの様子を伺っているのが気配で伝わってきて腹立たしいことこの上ないが、初デートで絹田に遭遇してしまった人間がこれくらいの被害で済んでいることはかなりの幸運といえるだろう。
幸運。そう、実際僕は今この瞬間、世界で一番幸せな人間に違いない。意中の人と、日常から隔離されたような神秘的な場所で向かい合っているのだから。青い海を背にした成瀬さんの姿は大変に眩しかった。潮風が成瀬さんの柔らかな黒髪を弄んでいる。冬の澄み切った夜空みたいな瞳が僕を捉えて離さない。僕はなんだかたまらなくなって、今すぐここで「君が好きだ」と伝えてしまいたくなった。衝動のまま息を吸い込んだとき、僕の頭上に影が差した。何事かと上を見やると、太陽を背に、何かが宙を舞っていた。それは重力に導かれて下方向にぐんぐん速度を増し、しまいにはほとんど弾丸のような勢いで僕をめがけて落ちてきた。
「危ない！」
遠くで絹田の声が聞こえた。僕が頭に強い衝撃を感じて意識を手放す直前、最後に見たのは視界いっぱいに広がる真っ赤な鯛であった。気が付くと、僕は自室のベッドの上でスマホを握りしめていた。
またか。どうなってるんだ。鯛が頭に衝突して気を失ったのではなかったか？混乱しつつ頭に手をやるが、けがの痕跡はない。手にしていたスマホをのぞき込む。メッセージアプリが起動しているが、昨日成瀬さんに送信したはずのメッセージはなかった。確認すると、日時は昨日成瀬さんにメッセージを送る少し前になっていた。
「また夢をみてたのか？」
本当にあれは夢なのか。僕はやや釈然としない気持ちを抱えながらも、他に納得できる説明も思いつかなかったので、とりあえずは夏の日差しが見せた白昼夢だと結論付けた。淀姫神社で成瀬さんと過ごした爽やかなひと時が現実でなかったことに落胆しないではなかったが、明日のデートの予行演習ができたと考えれば悪くない。
「そうだ、成瀬さんをデートに誘わねば」
そう思ったそのとき、
「淀姫神社はやめておけ」
と頭の中で声がした。僕の声ではない。いったい誰の声だろう？どこかで聞いたことがある気がするが、洞窟で反響する音のようにぼやけてよくわからない。とにかく、先ほどの夢のこともある。デートは念のためほかの場所にしよう。僕はたっぷり1時間かけて文章を作成し、それからさらに3時間ほど逡巡したのち、次のメッセージを成瀬さんに送信した。
「お久しぶりです。

地域密着部の夏休み課外活動を行おうと思うのですが、明日、藤ノ平ダムを散策しに行きませんか」

藤ノ平ダムは、玄海町南部を東西に流れる有浦川の中流をせき止めて作られたダムである。付近には小さな滝や遊歩道、公園などがあり、自然に囲まれた空間で落ち着いて会話ができるスポットだ。よし、明日ここで成瀬さんに告白しよう、と僕は自分に誓った。ダムなら鯛が降ってくることもないだろうし。

これは余談だが、有浦川の中には、かつて力持ちの無双五郎という男が山から投げて落としたと言われている「船繋（つな）ぎ石」と呼ばれる直径６ｍの大きな石があるそうだ。「最高の日本晴れだ」

翌日、僕は成瀬さんとの待ち合わせ場所である藤ノ平ダムの水辺の広場に来ていた。僕は夢の中で二度も事故に巻き込まれて気を失っていることが気になって、今回は頭にヘルメットを装着してきた。初デートにヘルメットとはかなり個性的なファッションセンスの男だと成瀬さんに思われかねないが、確実にデートと告白を完遂するためには致し方ない。待ち合わせの時間まではあと２時間あるが、家にいても落ち着かないので早めに来た。昨夜の成瀬さんの返信は「行きます」の４文字だけという、夢同様非常にそっけないものであったが、僕を舞い上がらせるには十分であった。降り注ぐ日差しを肌に感じながら、どれくらい時間が経っただろうか。僕がそわそわと広場の階段を上ったり下りたり、四つ葉のクローバーを探したり蝶を追いかけたりしていると、視界の端に人影が映った。心臓が早鐘を打つ。うっすらと嫌な予感を覚えながら振り向くと、絹田がいつものうさんくさいニヤけづらで立っていた。

「またお前か！」

なぜだ、どこに行ってもこの悪夢のような男がついてくる。動揺して思わず大きな声が出た。

「野鳥観察に来たんだ。鳥を見るのが趣味でな。まぁ、俺のことは気にせずデートに励んでくれ。」

スケッチブックを軽く掲げて絹田が言う。憎たらしいことこの上ないがまぁいい、この辺りは公園や遊歩道などもあり広々としているため、さほど絹田の存在は邪魔にならないだろう。

成瀬さんは約束の時間ぴったりに現れた。

「や、やぁ」

緊張で声が裏返る。

「こんにちは、先輩。」

普段は雪のように白い成瀬さんの頬が薄桃色に上気していたため、まさか成瀬さんも僕に好意を抱いているのではあるまいかと期待に胸が躍りかけたが、なんのことはない、

照り付ける夏の日差しのせいであった。僕たちは涼を求めてダムの周辺にある轟の滝を目指すことにした。木漏れ日の中を2人並んで歩く。距離を空けて絹田がこそこそと後をつけているのに目をつむれば、至福の時間だ。渓流に沿って歩く。騒がしい蝉時雨に2人の会話を阻まれぬようにと、おのずと成瀬さんとの距離が縮まる。シャンプーの香りを鼻腔に感じ、心臓の鼓動が早まる。がなりたてる蝉の求愛に当てられて、この場で愛を叫びたくなった。深く息を吸う。そのとき、

「避けろ！」

背後から絹田が叫んだ。視線を上げると、僕の頭上めがけて大きな石が降ってきていた。石の飛んできた方向の山の斜面に見知らぬ男が立っているのが見えた気がしたが、次の瞬間、頭に被ったヘルメットを突き抜けるほどの強い衝撃を受けて僕はそのまま意識を失った。気が付くと、僕は自室のベッドの上でスマホを握りしめていた。

またか。一体どうなっているんだ。何度も何度も夢の中で気を失っては、同じ時間を繰り返している。というより、あれは本当に夢なのだろうか。巨大金玉狸、宙を舞う真っ赤な鯛、そして巨石を投げる男……。現実の出来事にしては不可思議すぎるが、夢にしては妙な現実感がある。混乱のうち、無意識に言葉が口からこぼれた。

「僕は今も繰り返しの中にいるんじゃないか？」

だとしたら、また僕は何かで気を失い、巻き戻されるのだろうか。何度も、何度も、何度も……。それはいつまで続くのだろう。終わりはあるのか？まさか永遠に、この不気味なループから抜け出せないのではないか。それはこの奇妙な繰り返しが始まったときから、ずっと僕の心の奥底にあった疑惑であり、そしてずっと、考えないようにしていたことだった。僕が不安に駆られ、膝を抱えていると、

「明日はデートに行くな」

と頭の中で声がした。僕の声ではないこれは、いったい誰の声なんだ？どこかで聞いたことがある気がするが、洞窟で反響する音のようにぼやけていて、やはりよくわからない。頭の中の声に従おうと思ったわけではないが、成瀬さんとのデートを明日にこだわる理由はない。明日はとりあえず家でおとなしく過ごそう。家にいれば謎の男から石を投げられることもないだろうし。

僕の家は玄海町の西、仮屋地区にある。穏やかな仮屋湾に面した、漁業の盛んな地域だ。これは余談だが、仮屋地区には仮屋湾を挟んで対岸同士で鬼が石を投げ合って喧嘩をしていたという言い伝えが残っている。翌日、昼時を少し過ぎた頃に来客を告げるインターホンが鳴った。両親は仕事で出かけており、家には僕しかいない。玄関の手前まで来て、ふと立ち止まる。宅配便の配達か何かだろうと思っていたが、今日という日は何が起きるかわからない。音を立てないように用心しながらドアスコープをのぞき込む。すると、ドアの向こうに立っていたのは成瀬さんだった。心臓が早鐘を打つ。なんとか平静を装いながらドアを開けると、成瀬さんの写真を持った絹田がいつものうさんくさい

ニヤけづらで立っていた。
「お前かよ！」
動揺して大きな声が出る。
「どうしてお前が成瀬さんの写真を持っているんだ。」
「愚問だな。俺は絹田だぞ。」
「その一言で納得できてしまうのが恐ろしい。だが絹田、盗撮は犯罪だぞ。その写真は俺が責任もって処分しておくから寄こせ。」
「何を言う。これは俺が成瀬と取引して合法的に手に入れた写真だぞ。」
な、なんだって。この男の交渉能力にはまったくもって驚かされる。交渉人として国連とかで働いたらいいんじゃないか。
「というかお前、何しに来たんだ。」
「何って、友達の家に遊びに来たら悪いか。」
勝手に家に上がり込みながら絹田が言う。
「僕とお前がいつ友達になった。」
頭痛がしてきた。どうして毎度、どこにいてもこの男に遭遇するんだ。もしや絹田がこの一連の奇妙な出来事を仕組んだ黒幕なのではあるまいな。ありえる。なぜならこの男は絹田だからだ。たった今浮上した疑念を絹田にぶつけようとした瞬間、耳をつんざくような音がしてリビングの窓ガラスが割れた。
「なんだ！？」
断続的に家が揺れる。地震というより、何か大きなものを続けざまにぶつけられているようだった。
「まずいな、ここも駄目か。」
絹田が呟いた。
「おい、絹田。お前何か知ってるな。これは一体何なんだ。」
強い揺れに立っていられなくなり、僕は床に這いつくばりながら叫ぶ。
「話は後だ。このままじゃ家が倒壊する。外へ出るぞ。」
絹田に言われるがまま、僕らは家を飛び出した。家の周囲に大小さまざまな石が散らばっているのが見えた。
家のすぐ目の前には、仮屋湾が広がっている。その海岸に、頭から角を生やした赤い肌の大きな人間が立っていた。違う、あれは人ではない。鬼だ。やっぱりこれは夢だ。だってこんな光景ありえない。鬼は海の向こう岸へ向かって、海岸にある無数の大きな石を投げている。そしてその方向からこちらへ向かって、同じように石が飛んできているのだった。向こうの岸にも鬼がいて、石を投げ返しているとでもいうのだろうか。
「これは夢だ、これは夢だ……。」
僕は絹田と、海岸のそばの木々に身を潜めながらうめいた。鬼たちは仮屋湾を挟んで石を投げ合う喧嘩をしているらしかった。迷惑すぎる。石の応酬は止まる気配がない。僕

らが隠れている木にも先ほどから何度も石がぶつかっている。
「あいつら、しょうがねぇなぁ。」
しばらくして、絹田が舌打ちとともに立ち上がる。引きとめる間もなく、絹田は木立を飛び出した。石の雨の間を縫って軽やかに駆けていく。あっという間に鬼のもとへたどり着き、一言二言耳打ちする。鬼はしばらく考え込み、駄目押しの絹田の一言で石を投げるのを止めた。向こう岸の鬼もそれにならったようだ。石の投げ合いが止む。やれやれといった表情で絹田が戻って来た。
「絹田お前、鬼に何を言ったんだ。」
「争いの不毛さを説いてきた。」
飄々と言い放つ絹田に、開いた口が塞がらない。やっぱり交渉人として国連とかで働くべきだろ、こいつ。
その場にへたり込みながらあたりを見回すと、海岸の向こうから成瀬さんが歩いてくるのが見えた。成瀬さんもこの海岸周辺に住んでいるため、突然の地鳴りに驚き、様子を見に来たのだろう。鬼の姿はいつの間にか消えている。僕は一目散に駆け寄って成瀬さんに声をかけるべきか、まずは落ち着いて身だしなみを整えるべきか、混乱したままの頭で考える。
「水しぶきでパンツまでびしょびしょになった。」
とぶつくさ言いながら僕の隣でズボンを脱ぎ出す絹田。おい、成瀬さんにあらぬ誤解をされたらどうする。と思ったそのとき、僕のすぐそばでボキリと何かが折れるような、とてつもなく不穏な音がした。見ると、先ほどまで石のつぶてから僕を守ってくれていた大木が、太い幹の中心からポッキリと折れて僕に向かって倒れ込もうとしていた。また気絶するのか、と青ざめて身を固くした瞬間、木立に絹田の声が響いた。
「しゃがめ！」
鋭い声に気圧されて、ほとんどひっくり返るような形で僕は仰向けに倒れ込んだ。そのとき、僕の頭の中で何かの回路がつながった。そうだ、この声だ。僕の頭の中で響いていた声は、毎朝僕に忠告を寄こしていたあの声は、まさに今、木立に反響した絹田の声だったのだ。
どうして絹田が僕に忠告を？あの絹田が。人を困らせるのが何より好きな絹田が。今だって僕を助けてくれた。どうして。なぜだ。
絹田が一糸まとわぬ姿で僕の上を飛び越える。何かが僕の鼻先をかすめた。それは柔らかくて、かすかに温かく、そして、湿った犬の匂いがした。絹田の足の間からぶら下がる、巨大な金玉だった。どうやってズボンに収納していたのかわからないほど大きなその金玉は、まぎれもなく、浜野浦の棚田で僕がトラックから助けたあの狸のものであった。僕の体を飛び越えた絹田は、そのまま幹の太さが自分の胴回りよりも何倍もあろう大木を蹴り飛ばす。衝撃波で森中の木々がざわめく。大木はしばしの間宙を舞い、大きな音を立てて地面に落ちた。

むき出しの肢体で華麗な着地を決めた絹田に、たった今はじき出された答えをぶつける。
「君はあの時の狸か！？」
「バレてしまってはしかたない。そう、俺は絹田であり狸だ」
キヌタはタヌキ、というくだらない回文を思いついたが飲み込む。
「よくよく思い返してみれば、あのとき巨大金玉狸を助けてから、いろんなことがおかしくなったんだ。」
「助けられてなどいない。俺は一人でも逃げられたのに、お前が乱入してきて勝手にトラックにはねられたんだ。」
憮然とした表情とは裏腹に、絹田の声色はどこか嬉しそうだった。
「あの瞬間、トラックにはねられてお前は死んだ、いや、正確には死ぬはずだったのを俺が時間を巻き戻して助けてやったんだ。」
時間を巻き戻す？なんだかとんでもないことを言っているが、絹田ならそれくらいできても不思議じゃない。なぜならこいつは絹田だから。
「と、そこまではよかったんだが、おまえ、歴史の修正力ってのを知ってるか。」
知らん。僕は素直に首を横に振った。
「ようするに過去改変によって歴史が大きく変わってしまうのを邪魔する力のことなんだが、つまり過去に戻って前とは違う行動をとっても、その歴史の修正力ってのが働いて、たとえばお前があの時間に何らかの事故で死ぬというような大まかな流れは同じになるってことだ。」
なるほど、そういうことだったのか。成瀬さんとのデートでの災難の数々を思い出す。
「まぁお前はこの先、生きてても死んでても世界に大した影響を与えないだろうから、大きな歴史の修正力が働かずに振り切ることができたんだろうな、いやぁよかったよかった。」
よかったのか？切ない人生のネタバレを聞いてしまったのだが。というかつまり今までのことは全部夢じゃなかったということか。金玉のでかすぎる狸や、宙を舞う赤鯛、巨石を投げる大男、石を投げ合う鬼……そして今僕の目の前にいる金玉でか男。世界は思っていたよりも広く、無軌道で、なんでもありだった。今回僕が目にしたものだって、きっとほんのわずかな片鱗にすぎないのだろう。

気づくと、辺りは夕日に照らされて真っ赤に染まっていた。成瀬さんが向こうで、燃えるような真紅の水平線に足を止めるのが見えた。
「絹田。」
僕は夕日を背にして立つ絹田に呼びかけた。
「助けてくれてありがとう。」
一瞬の間の後、
「うるせえ。」

と返って来た。
「言っておくが、俺がお前を助けたのは単なる気まぐれだからな。本来の俺のアイデンティティーはいたずらで人を困らせることであってだな。いいか、俺に助けられたなんてことは誰にも言うなよ、わかったな。」
早口でまくし立てる絹田。逆光で顔は見えないが、照れているのだろうか。この男、思っていたより可愛げがある。矢継ぎ早に投げつけられる言葉を聞き流しながら、僕は木立を抜け出た。成瀬さんが僕に気づく。僕は成瀬さんに向かって、石だらけの海岸を歩いていく。夕空に切り取られた成瀬さんのシルエットを目指すうち、一連の出来事が僕の頭の中で泡のように浮かんでは消えた。浜野浦の棚田、淀姫神社、藤ノ平ダム……違う時間軸の今日、僕らはいろんな場所へ行った。その一つとして、君は覚えていないだろうけれど。そういえば、成瀬さんと夕日を見られたのはこれが初めてだな。そんなことを考えているうちにいつの間にか成瀬さんの目の前まで来ていた。
「こんにちは、先輩。この辺りでおかしな音が聞こえたので来てみたんですけど、なんだったんでしょうね。」
鬼が石を投げ合っていたんだ、などと言っても信じてもらえまい。僕は曖昧に微笑んでごまかし、用件に入る。
「聞いてほしいことがあるんだ。」
言葉を発すると同時に、涼やかな風が吹いた。太陽が水平線に溶けていく。不思議なくらいの静寂が辺りに満ちる。夕日を乱反射して琥珀色に透き通った成瀬さんの瞳に見つめられ、目が離せなくなる。意を決して口を開く。
「明日、僕と浜野浦の棚田に行きませんか。」
もう一度、あの場所で初めてのデートをやり直そう。そして、今度こそ君が好きだと伝えるんだ。背筋を伸ばし、琥珀の瞳を見据える。
「ごめんなさい。明日はデートなんです。」
照れたようにはにかみながら、成瀬さんは言った。僕は言葉の意味が呑み込めず、しばし固まる。
「こ、恋人いたの？」
「今日できたんです。同じクラスの友達だったんですけど、今朝デートに誘われて、付き合うことになりました。別にそんな気なかったんですけど、浜野浦の棚田の雰囲気にのまれちゃったんですかね。」
そんな。よりにもよって、今日、浜野浦の棚田で告白されて付き合ったっていうのか。それは本当なら僕がやるはずだったことじゃないか。嘘だと言ってくれ！
「じゃあ、そういうことなので。」
膝から崩れ落ちそうになっている僕を置いて、成瀬さんが去っていく。
「振られてやんの。」
ズボンを履きながら、木陰から出てきた絹田が言った。

「絹田！もう一度時間を昨日に巻き戻してくれ！」
「いやだね、面倒くさい。」
取り付く島もない。打ちのめされて地面に両手をつき、オイオイと泣く僕を慰めるように、絹田が背中をさする。
「しょうがねえなぁ。俺のとっておきの場所に連れて行ってやるから元気出せよ。」
とっておきの場所？僕は生まれも育ちもここ玄海町だ、この辺りの地理は知り尽くしているが、一体どこへ連れて行ってくれるというのだろうか。僕は絹田に連れられて海岸を後にした。住宅街を抜け、高校の前を通過する。部活帰りの学生たちの怪訝な視線を背中に感じる。絹田と歩いているせいだろう。この男の悪名は学校中に轟いているのだ。木々の間を通り抜け、そしてまた海岸に戻って来た。
「近場を一周しただけじゃないか。」
「まぁまぁ、いい気分転換になっただろ。」
確かに、歩いたことで気持ちは少し落ち着いた気がするが、そのためにとっておきの場所に連れていくなどとうそぶいたのか、と苦言を呈しようと隣の男へ向き直ったところで絹田の視線が海へ向いていることに気づく。
先ほど海岸を真紅に染めていた日輪は完全に水平線の彼方へ姿を消し、赤い陽の名残りを残して、透けるような紫が空を覆っていた。
「おぉ……」
思わず感嘆の声が上がる。きれいだ。凪いだ海に月が揺蕩っている。まさか絹田の言っていたとっておきの場所とは、今この時間のこの場所のことだったのだろうか。涼やかな潮風に心の淀みがほどけていくのを感じる。
「うん、一度の失恋くらいでくよくよしてられないよな。」
「お、元気出たか？」
「あぁ。ありがとう、絹田。」
「よせやい、礼を言われるようなことはしてねえって。」
絹田が笑う。僕は絹田という男のことを誤解していたのかもしれない。この男はいたずら好きで困ったやつだが、それはただの目に見える一面であって、本当のところは情の深い、優しい男なのかもしれない、と思う。世界は広く、人の心もまた計り知れないのだから。
それから僕らはしばらくの間黙って海を眺め、各々の家路についた。

「ただいま～。」
家に帰り、風呂に入ろうと服を脱いでいるときだった。クシャ、と紙が折れるような音がした。なんだろう、と脱いだ服を見ると、Tシャツの背中の部分に「失恋中」と大きく書かれた紙がセロハンテープで貼り付けられていた。
「あ……！」

俺のとっておきの場所に連れて行ってやる、と言いながら僕の背中をさする絹田のニヤついた笑みを思い出す。あのとき貼られたのか。待てよ、あの後たしか、辺りを一周したんだよな……。部活帰りの学生たちの不審げな視線が脳裏によみがえる。僕は脱衣所に崩れ落ち、頭を抱えた。

「あ、の野郎〜……！」

玄海の空に僕の怒声がこだました。

皆様も玄海のいたずら狸にはご注意を。